



15 頁から 19 頁 抜粋

梅本矢市さんの場合

「山津波に襲われたあと、自分が何をしていたか、全く記憶がありません。近所の人の話では、四日も五日も、女房や子供の名前を呼びながら谷底を行ったり来たりしとったそうですが ...」－神戸市葺合区葺合町山郡、市水道局布引貯水場勤務、梅本矢市さん（37）はそう語る。気がついたときは、シャツもズボンも泥だらけ、髪の毛は逆立っていた。

梅本さんの家族七人は、七月九日の夜、世継山の斜面をすべり落ちてきた巨大なドロの流れにのみ込まれたのである。

母きぬえ(59)=七月十一日、神戸港沖で遺体発見。長女まり子(14)=同十五日、生田川尻で。長男憲三(9 才)=同十七日、布引貯水場で。妻明子(36)=同二十六日、同じ場所で。二女良子(11)=同二十七日、同じ場所で。父助市(62)=同二十九日、同じ場所で。三女直子(6 才)=八月十八日、生田川尻で－。七人が、小さな位はいに変わって、梅本さんの机の上に並んだのは、四十一日目だった。

あの日、梅本さん一家は、ふだんと変わらぬ平穏な朝を迎えた。良子さんが前日から、市街地の友人宅へ泊まりがけで遊びに行っており、あとの子供たちは退屈しのぎに母親と千羽ザルを折っていた。

午後二時すぎ、本降りになった雨の中を、良子さんが走って帰ってきた。「あれ、きょうも泊まってくるのと違うたんか」「うん、何や知らん、帰りとうなってん」そう答えると良子さんはみんなと一緒にツルを折り始めた。

「虫が知らせたんやろか、いつもなら、二泊も三泊もしてくる良子が、たった一晩で帰ってきよった。そういえば、末っ子の直子もあの日に限って、私と二人きりで童謡のレコードを聞きたがりよったなあ」梅本さんは、しみじみ回想する。

そのまま、夜になった。八時半ごろ、あまり雨がひどいので、家の横のミズを調べに出たところ、ドロ水があふれ、ヒザの上まで達した。

梅本さんは、近くの桜茶屋へ妻と子供を避難させることにした。雨は、はだに突刺さるような激しさを降っていた。

「気をつけて歩けよ」

「大丈夫や」

五人は互いに抱合うようにして夜のやみに消えていった。梅本さんにとっては、これが家族の見納めとなった。

九時十五分ごろだったろうか。

突然「ドーン」という大音響が谷間にこだました。

続いて地鳴り。ベキ、ベキッと木の折れる音。

岩が転がり落ちる音...

梅本さん方の横のミゾで濁水をくいとめるのに必死だった梅本さんと桜茶屋の主人、森岡昇さん、葺合署市ヶ原駐在所の打越克己巡査の三人は、悲鳴を上げて抱合った。

山が再び静ったとき、「何やろ」ちょっと行ってみてる」森岡さんが懐中電灯を持って出かけたが、すぐ引返してきた。「えらいこっちゃ。だれもおらんがな」「ええ加減な冗談いな」「何が冗談や」

こわごわ懐中電灯をかざしてみた。丸い光の輪の中は、見渡すかぎり、オドロオドロした山の土だった。妻子の避難していた桜茶屋もない。両親の家もない。駐在所もない。

梅本さんは、その場にへたへたとくずれ落ち、記憶を失った。気がついたのは五日後の十四日である。「これから先、何を目的に生きていけばいいのか」という虚脱感は、それ以来、ずっと消えない。

跡始末やなんかで二カ月近く勤めを休んでいる間に明子さんの晴れ着も、直子ちゃんの人形も、あの日みんなが折っていた千羽ザルも、みんな焼捨ててしまった。

梅本さんの心に浮かんでくるのはただ一つ。

「祖父の代から七十年間、住み慣れた市ヶ原だが、やはり街へ降りよう」ということだけであった。